



街並を見る

堤 豪範

この4月に定年退職して、早5ヶ月たちました。京都大学附属図書館書庫掛（現在の情報サービス課特殊資料掛）4年、経済学部図書室で、和書目録と洋書受入業務を13年、その時期、大図研にはいり、いろいろなことを学ぶことが出来ました。その後16年間で、学部の中に複数の学科図書室がある工学部図書室と理学部図書室で、主に図書室間の調整連絡業務を、数理解析研究所図書室では、目録入力からカウンター業務まで図書業務全般について経験し、最後に附属図書館では情報管理課、総務課あわせて4年、合計37年間大学にお世話になりました。決して仕事一図ではなかったけれど、お蔭様で図書館職員として勤めあげることが出来たと心から喜んでおります。

さて、退職後の近況報告をします。掃除、洗濯、料理と不完全ではありますが、主夫業務をベースに、写真三昧、映画三昧、読書三昧の毎日を送っています。大津市立図書館や滋賀県立図書館も大いに利用しています。特に、自分が日夜生活している地域、変わり行く街並をカメラにおさめるために、近辺を歩き回っています。

僕の住んでいる地域は膳所で、お城は残っていませんが、一応城下町です。街並みは37年前に比べると古い町家がかなりなくなっています。道路沿いに東西に並んでいた町家が、マンション、駐車場、無理な南向きの新築立替のために、歯抜け状態の街並みになっているのが、現状です。城下町の雰囲気はありません。

大津市立図書館より入手した「幕末の膳所藩城下明細地図」の解説によりますと、もともと、膳所が城下町になったのは、慶長5年（1600年）に関が原の合戦で勝利を収めた徳川家康によって城が築かれ、膳所の町もそのときに整えられたのが始まりです。それまでは、漁夫、農民の住む一寒村で、町並みが長くて汚いと言われていたのを膳所藩ではその汚名を返上するため街道筋の町家の屋根を全部瓦にふき替えさせたということです。膳所城はびわ湖を背に、今の膳所公園内に天守閣がそびえ、非常にユニークな城だったと思われます。いま残っておれば湖上に写るお城がどんなにすばらしいか、かなりの写真がとれるのにと残念です。このように他の城下町

(次頁へ)

[目次]

街並を見る	堤 豪範	...	1
カタログについて	堤 美智子	...	2
大学図書館問題研究会第34回全国大会（奈良）報告	大館 和郎	...	3
京大図書館史こぼれ話 その四	廣庭 基介	...	5
2002、2003年度会費納入のお願い		...	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

とは違って、防衛のためもあり、また、町を大きく見せるために街道筋に沿って南北を長く複雑にし、高祿の侍屋敷は濠の内側に設け、濠の直ぐ外側の街道筋に町屋を、一般の侍屋敷はその外側に設けられていたということです。膳所といえば、いまではほとんど見られなくなりましたが、街道筋の西一帯は土塀で囲われていたのが特徴でした。これも、残っていれば、一段と城下町の雰囲気がかもし出されたことなのでしょうに、惜しまれます。今の膳所公園を南にいくと、「瓦ヶ浜」というところがありますが、これは、街道筋の町家をすべて瓦ぶきにするために、大量の瓦を焼いたところだそうです。因みにその費用は街道に面した側の瓦は藩が、裏側は町家の負担としたと言われています。城下町には、造酒屋が何軒もあり、芝居小屋、豆腐屋、他に刀屋、結髪屋、仕立て屋、乾物屋、漢薬店、鍛冶屋、桶屋、煙管屋、ゆば屋、郷宿などがあり、当時膳所の名産は膳所茶、組紐、柳行李があり、組紐を織る織屋が所々にあったそうです。たしかに、僕は中学生のころに引っ越してきたのですが、当時、小さい燃糸工場がいたところに見かけられたのもその名残だったのでしょね。いまは、土塀もないし、工場もないし、ついこの間まであった酒屋（当時の造酒屋を思わせる大きな町家）も壊されて、コンビニになったし、二の丸、三の丸、北の丸などは湖岸道路になっているし、当時の面影を探すのは並大抵ではありません。

以上、退職してやっと、長年住んでいる街並を落ち着いて見渡そうという気持ちになったのが、いまの心境です。今後は地域に根をおろし、スローながら、じっくりやっていきたいと思っています。

最後に、膳所古地図に関して、大津市立図書館のレファレンス担当者の対応の早さには本当に感心しました。

参考文献) 「幕末の膳所藩城下明細地図」解説・竹内将人 昭和44年

つつみ ひでのり (元京都大学附属図書館)

カタログについて

堤 美智子

今年3月末で京大の図書館員を中途退職しました。趣味でやっているルリユール(工芸製本)と花園大学での嘱託としての仕事の関係で、まだまだ図書館とは縁が切れません。それどころか現職の図書館員のみなさんに一利用者としてお世話になる一方の立場になりました。これからも、よろしく願いいたします。

ところで、先日ある自然科学系の小さな専門図書館にお邪魔しました。そこは専門の関係で古くは16世紀出版からの洋書を所蔵しています。日本のなかでも京都という土地柄、関東大震災や太平洋戦争の戦禍を受けた東大にもないという、そういう意味で貴重な洋書も少なからず所蔵しています。なぜこの図書室にお邪魔したかという、司書の方が自館所蔵資料の傷みを心配して今後の保存についての相談をもちかけて来られたからでした。製本家の方と一緒に私もまずは書庫見学にうかがいました。

いわゆる稀購書ではないのですが、London Philosophical SocietyのTransactionなど創刊号から革製本され、背が割れた状態で書架に並んでいたりします。自然科学系の資料ですから複写依頼なども頻繁にあり保存と利用の両立という問題も発生していました。このような修理や保存対策については研究者側の理解を得て何らかの予算措置をし、気長に手当てをしていかなければいけませんね、ということになりました。

その場に丁度、数年前にその研究室を定年退官された研究者の方が居合わせ、その所蔵資料や標本類の保存の大切さを、日本が朝鮮を侵略していた当時の事情などもまじえて話して下さいました。朝鮮や中国から占領当時持ってきたものは現在、現地の研究者が研究しようと思っても現地に存在しないので、日本に来て研究しなければならないのだそうです。一方で日本の研究現場では未整理や未発見のものは、そのものの価値や意味が分からなくなって捨てられ

て行くようです。占領してきた資料などもそんな捨てられるものの中に入り勝ちなのは良く理解できます。お話を聞いてゾッとしました。

その先生のお話には勿論、本についてのこともあったのですが、ついこの間まで図書館の職員であった身につまされることがありました。それは「日本でここにしかない、やあ、もしかしたら世界中でここにしかない本もあるような、ここの蔵書のカタログが作りたかったなあ」という先生の言葉です。カタログと先生は言われ、私も冊子になった目録記述だけではなく、解題や解説、本の写真も載っているイギリスあたりの古書店が出しているようなカタログを連想しました。その時ひそかに「修理をしながら洋書の古版本の記述目録データを作りつつ、解題つきカタログを作りたいなあ。」と思いました。今、現場ではそれどころではない、ということに嫌というほど分かります。わたしもまだ京大に勤めていたらこのような事は「とても不可能、呑気な話」として自分の意識に上らせることはなかったと思います。しかし、そこは一步離れて見てみますと NII に目録登録されているデータは既にあり、解題もここなら研究者の協力を得られそうです。決して不可能なことではないな、とひそかに勝手に思っています。今の私の楽しい空想です。

偶然というか今はそういう時期なのか。大図研奈良大会の丁度そのころ Exlibris というアメリカの rare book librarian 中心のメイリング・リストでアメリカ合衆国の研究図書館で所蔵されている未整理のコレクションへのアクセスをいかに研究者や学生、一般市民に保障していくのかというテーマの会議が今年9月に LC 主催で開かれるというニュースを読みました。その会議へむけて” Hidden collections, scholarly barriers: creating access to unprocessed special collections materials in North America’s Research Libraries” というタイトルの15ページの白書も読んでみました。この白書に対して会議までに意見を出して欲しいというわけです。一読してみて未整理資料、特に special と言われる、出版ですと1820年以前、マニユスクリプト、手稿の類の目録データの作り方や規則が問題になっているらしいのです。というのは広くアクセスを保障するにはインターネットに乗せるのが一番有効であるわけですが、そのためには普通の洋書目録規則 AACR2R ではそのまま適用できない。記述目録 (descriptive catalog) データを創る必要があります。この会議では丁度良く 2003年3月に改訂された DCRM (Descriptive Cataloging for Rare Materials) へのガイドも行われるようです。DCRM の中身を知りたくてネットを調べていましたら、Association of College and Research Libraries, Rare Books and Manuscripts Section のサイトで The Rare Materials Cataloger’s HelpNet というものにぶつかりました。ここにはボランティアでその道の専門家がリンクされていて質問できるようになっています。

細かい説明は不要でしょうが、私のように申し訳なくも現場を離れてから、し残した仕事に気がついて、しかも単に夢のような空想ばかりしているような者にはチョットした目から鱗でした。大図研というような個人レベルでの研究会のようなところでこそ、このアメリカ人のボランティア精神を学び直さなければと背筋を伸ばしています。

つつみ みちこ (花園大学)

◆大学図書館問題研究会第34回全国大会(奈良)報告◆

大館 和郎

大図研第34回全国大会(奈良)に3日間通しで参加した。会場は奈良公園に隣接した奈良文化会館(8月23日・24日)と猿沢荘(8月25日)。初日の全体会は出席者が60数名で出足はまだこれからというところである。議案討議についてはそれほど活発とはいえなかった。支部単位で事前に討議するということが少なくなったのだろうか。山口支部が解散するという報告があったが、支部活動を維持していく上での困難な状況が拮がりつつあるようだ。

会場の一角で自主企画としてルリュール(工芸製本)が展示されていた。京都支部の堤豪範さ

んの写真集に同じく京都支部の堤美智子さんと大澤紀子さんが装幀製本を施したもの。ヨーロッパ生まれの製本技術なのに和紙で装幀されているのが珍しかった。

24日の午前は課題別第4分科会「大学・高等教育政策」に参加した。まず、今年の3月に東京大学を退職された新居さんが国立大学法人案審議の国会傍聴について報告された。そのあと高等教育政策をめぐる各大学の対応についての情報交換といったかたちで進んでいった。この法案は7月9日の参議院本会議で可決、成立し、各大学は現在、来年4月の法人化に向けて準備作業に追われている。しかし、法人化に向けての全体の情報が大学の構成員にほとんど伝わっていないという。6月10日の参院文教科学委員会で問題になった「国立大学法人(仮称)の中期目標・中期計画の項目等について(案)」が昨年の12月に続いて7月にまた出てきたという。そのコピーが分科会資料として配布されたが、内容はほとんど変わらない。図書館という独立の項目はあげられていない。これは図書館の法的位置が明確になっていないからなのか。分科会の出席者のあ一人は労働安全衛生法の適用に備えて、資格を取らされていると言われた。

私立大学の立場から見れば、国立大学法人化をもたらした文教政策の基本的な考え方がより重要になる。大学を競争的環境にシフトさせていくということで、競争的資金の獲得に傾いていく。この点についてのまとまった報告としては、法政大学大原社会問題研究所の若杉さんが、私立大学の立場から外部資金の活用についての報告をおこなった。その中で図書館の外部資金の獲得事例についても紹介された。主力となるのは文部科学省及び日本学術振興会の科学研究費補助金、日本私立学校振興・共済事業団の経常費補助金特別補助である。審査によって事業計画が採択されるためには、申請書類の中でいかに特色ある事業であるかをアピールしなければならない。このような競争的環境に法人化された国立大学も加わるわけであるが、そもそも今まで国費を投入されてきた国立大学と私立大学とはスタート地点が違うのだから、格差が広がるばかりだという私立大学側からの批判もよく聞かれる。大学間格差については、最近読んだ『大学界改造要綱』(アレゼール日本編 藤原書店 2003.4)のまえがきで次のように述べられている。「私たちは、日本の大学関係者がこれまで、大学界の将来をめぐるグローバルなビジョンを作り出すことができなかったことの一の原因は、大学関係者が徹底的に分断されていることにありと考えている。国立/公立/私立といった分断や大学間格差のみならず、大学内部も専任教員、非専任教員、大学院生、学生、職員らと分断され、さらに外国人教員や留学生の存在、女性教員をめぐる諸問題が事態を複雑にしている。各大学で進められている「改革」は、そのような分断された構造を前提とし、そのことを不問としているがために、大学界にかかわるあらゆる人々がその将来をめぐるグローバルなビジョンを共有し、本当の「改革」を遂行することを不可能としている。」

大学の中で図書館という部署は、他大学と協力関係を築いていかないと、業務に支障が出る部署と言える。これが入試課になると他大学と競合関係が強くなる。もちろん実際は、どちらかに極端に偏るのではなく、協力関係になったり競合関係になったりといった形になっていると見るのが妥当だろう。しかし経営環境が厳しくなれば、競合関係が強くなるのは避けられない。

24日の午後は課題別第7分科会「図書館経営分科会」に参加した。まず京都大学工学研究科・工学部電気系図書室の赤澤久弥さんが「図書館のミッション・ステートメント」について報告された。最近、大学図書館で作成されるようになった背景の説明の後、外国の大学図書館及び国内の大学図書館の事例紹介があった。かなり簡単なもの(3行)から多くの項目を挙げたものまで様々だが、大事なことは「どのような理念のもとに」「誰に対して」「どのようなサービスを提供するのか」ということではないか。これに関連して「大図研ガイドライン」のことが思い浮かんだ。かつて大図研では、毎年の大会時に活動方針の一部として提案される「職場の実践課題」があったが、これがその後「政策骨子」となり、さらに「ガイドライン」となったが、十分な活用ができずに現在に至っているという経緯がある。これは図書館職員自身が業務の改善を行うための指針といったものであるが、その中で挙げられている項目は、「ミッション・ステートメント」の項目としても十分に通用するものがある。ただ「ミッション・ステートメント」は利用者を含めた外部の人間に向かって表明されるものだから、よりわかりやすいものであることが必要であろう。どの組織においてもアカウンタビリティ(説明責任)が求められている今、「ミッション・

ステートメント」がますます拮がっていくのは間違いないと思う。

続いて大阪医科大学図書館の茂幾周治さんが「大学図書館の将来計画：大阪医科大学図書館の場合」と題した取り組みの経過を報告された。2002年10月の図書館将来計画検討委員会が発足し、図書館に対するニーズを知るためにアンケートを実施した。その結果、(1)開館時間の延長と(2)医学情報処理センターと図書館の統合の検討という二つの計画が具体化された。(1)については、平日9時～23時(21時～23時無人開館) 土曜日9時～21時(17時～21時無人開館) 日曜、祭日9時～21時(無人開館)とし、利用サービスの範囲は館内閲覧と複写のみで貸出は不可とする。無人開館中の安全対策として保安職員の巡回と監視カメラの設置などが挙げられた。

(2)については、学内関連部署と統合に向けての合意作りを開始したが、現場と理事会等との意見の違いが表面化しているという。この大阪医科大学図書館の将来計画の場合はアンケート結果が重要な役割をはたしているが、これからは個々のサービス提供のレベルにおいてどのようにミッションが具体化されているか評価できるような事例報告を期待したい。

25日には二つの研究発表があった。まず、羽衣国際大学・羽衣学園短期大学の川崎千加さんが「司書の仕事の特性とは：職務設計モデルからのアプローチ」と題する発表をされた。半構造化インタビュー(あらかじめ質問事項を用意しながらも、実際には対象者の意識の流れや内省を重視して柔軟に対応していく方法)によって司書の仕事の特性を調査した結果を報告で、司書は経験を通して資料への知識や技能を獲得し、「誰かのために役に立った」と感じる時に、自分の仕事を有意味だと感じるが、情報化、設置母体の経営状態の悪化が絡み合い有意味感を低下させているという結論だった。ていねいに調査されたことは認めるが、結論はほぼ予想されたもので意外な発見はなかった。

続いて、大阪大学生命科学図書館の諏訪敏幸さんが「遠隔教育への図書館サービス(文献紹介と概観)」と題する発表をされた。遠隔教育とは「教育機関が計画し、実施するが/教師が学生と同じ教室内で直接に監督するというスタイルをとらない/あらゆるレベル(初等教育から高等教育・継続教育まで)の/非接触的な、メディアを通じたコミュニケーションを特徴とする/さまざまな形態(通信教育・放送授業・web base, etc)での教育・学習」と定義された。そして、通信教育、サテライトキャンパス、連携大学院、パートタイム院生という形で「大学の外」にいる多くの学生にも図書館サービスを提供し、学習・研究条件を保障するという見地から、相互協力のネットワークづくり、オンラインリソースの提供の条件づくり、図書館と利用者の関係のあり方などについて検討すべきだという主張には同感した。

おおだて かずお(京都学園大学 図書館)

京大図書館史こぼれ話 その四

京大初代図書館長島文次郎博士と「老いらくの恋」事件

廣庭 基介

島・川田双方の父親同士は知己であった(3)更に^{いわずさざなみ}巖谷小波の父親も・・・

島文次郎館長と巖谷小波も旧知の間柄であったのは、島館長の実父・野口松陽と、太政官の書記官としての先輩格であった巖谷小波の父・修^(いちろく 又は こばい)との父親同士が官僚であった繋がりがあったからでした。巖谷小波の四男・巖谷大四が昭和49年(1974)に『新潮選書』の1冊として上梓した『波の琵琶--巖谷小波伝--』の180ページに、小波が明治38年(1905)7月に死去した父・一六の遺骨を京都東山霊山護国神社裏の墓所に埋葬するために入浴し、時代祭の翌日(10月23日)の午後、「旧知の在京の作家堀江松華、大學図書館の島華水(廣庭注：華水は島文次郎の号)と三人で桂離宮を見学したあと、木屋町の西村屋に行き、そこへ^{まんてい}〔万亭〕^{もん}の紋を呼んだのである」という文言があります。(廣庭注：作家堀江松華は詳細不明ですが、『京都出版史』

